

# 創建

そうこん

巻頭言／大濱嘉彦・1

ネットワークOB&amp;OG④・2～3

海外派遣研究員報告・4～5

ヨーロッパ研修旅行報告・6～7

教室ニュース・8

2006・1・20 VOL.40 NO.2 (通巻117号)

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

昨年から今年にかけて、石綿（アスベスト）による健康被害、構造計算書の偽造（耐震偽装）、多量の降雪による深刻な雪害など、建築に関係する大きな事件が相次いだ。中でも、一級建築士が、お金の前にその誇りを捨てた、構造計算書の偽造は、前代未聞の愚行といわれても仕方があるまい。一方、このような暗いニュースだけではなく、一昨年からの自動車業界の好調に支えられて、我が国の景気は、徐々に回復傾向にあることは、極めて喜ばしい。この傾向で、建設業界も長い不況から、完全に脱することができれば幸いである。このように、最近の世相は、良い面と悪い面が相半ばする状況にあるが、先行きの不透明感は、なかなかぬぐいきれない。このような目先の世相だけではなく、日本の社会構造を根幹からゆるがす問題が進行しつつある。それは、これまでも問題視されてきた少子高齢化に加えて、2005年10月実施の国勢調査によれば、日本の総人口（1億2775万6815人）が1899年に人口統計を取り始めて以来、初めて「自然減」に転じたことである。既に、我が国の経済と産業を支える生産年齢人口（15～64歳）は、1996年から減少傾向に転じている。更に、通学しなく働きもしないニートが64万人、働くが定職を持たないフリーターが200万人を超える傾向にあり、若年労働者の減少が産業界にも大きな影響を与えている。これまでヨーロッパ諸国では、労働力の不足を移民によって補ってきたが、この労働力確保策は、移民を受け入れない日本の現状では不可能なことである。

少子高齢化と人口の自然減という背景の下で、資源に貧しい日本が、経済と産業を環境に配慮しながら、持続可能な開発（sustainable

development）を目指すには、科学技術の抜本的な振興に力を注ぎ、産業創出の推進力又は牽引力である「技術革新（innovation）」をもたらすことが不可欠である。絶えることのない「技術革新」こそが、強力な産業技術競争力を生み出す源泉となり得るものと考えられる。我が国の場合、この産業技術競争力で、知の国際的な大競争に打ち勝つ以外に進む道はないといっても過言ではあるまい。このような視点にたつて、最近、政府の総合科学技術会議（議長、小泉首相）は、科学技術創造立国の実現を目指すとして、2006年度から5年間にわたって実施する第三期科学技術基本計画を策定した（日

## 『少子高齢化と人口減の下での技術革新の重要性』

教授 大 濱 嘉 彦

刊工業新聞2006年1月1日号、この基本計画の以下の概要も同紙から）。この第三期基本計画によれば、投資目標は総額25兆円で、投資の重点をモノからヒト、組織（機関）から個人へ転換し、又、システム改革の中心は、①多様な人材の育成・確保の促進、②絶えざる「技術革新」の創出、③科学技術振興のための基盤強化の三つとなっている。更に、戦略的重点化科学技術として、第二期基本計画で定めたものと合わせて、「ライフサイエンス」、「情報・通信」、「環境」、「ナノテクノロジー・材料」、「エネルギー」、「ものづくり技術」、「社会基盤」及び「フロンティア」の8分野を設定している。第三期基本計画の最大の目標は、

「技術革新」を継続的に創出し、その成果の社会への積極的な還元によって、新しい社会構造を創成することにあるといえる。

日本における今後の「技術革新」を推進するには、20世紀の工業化社会から21世紀の知的／情報化社会への移行を十分に認識する必要がある。工業化社会では、主に、人間（ヒト）、材料とエネルギーからなる資源（モノ）及び財源（カネ）があれば、産業技術競争力を強化することができたが、知的／情報化社会では、これに、情報と地球環境保全を加えた社会的資本が重要な役割を果たすことになってくる。当然のことながら、創造力や知力を集約する知的／情報化社会が生まれることになる。知的／情報化社会では、工業化社会とは異なる価値観の上に立ったパラダイムに飛躍的な転換を図る必要がある。この際、単一民族国家に由来する日本人の古い思考風土を改め、本物志向に基づく新しい価値観を導入する必要性が強調されねばならない。いずれにしても、「技術革新」創出の役割は、理工科系大学や大学の理工科系学部とその多くを委ねられることになるので、本工学部も含めて、このような大学では、知の国際的な競争力を高めるように努力し、「技術革新」のための「人づくり」に専念すべきであると考えられる。そのような「人づくり」教育では、学生が本物志向に目覚め、目的意識をもって、知を磨く意義を認識し、創造力が育成されなければならない。

学生諸君もこの拙文の意味をよく理解して頂き、勉学に励み、「技術革新」の担い手となれる人になって頂きたい。そうでなければ、今日のような何不自由のない生活ができる時代は長続きせず、学生諸君にとって、明るい未来は保障されないと思う。



## 「今、教育は…」 ～教職を目指す学生へ～

福島県立福島工業高等学校

校長 関根 敬次

### はじめに

今回、機関誌「創建」の執筆の依頼があり受けることとなりました。題材内容は自由とのことですが、正直言って何を書けばよいか悩みました。建築関係の内容を書くにしても、ここ10数年の間遠ざかっているものでどうしようかと思いました。幸いにも教職を目指している学生もいるということですので、今までの経験から何かお役に立てればという思いからでした。

教員生活38年、退職を迎える年齢になりましたが、日々の喧騒の中であって実感が湧いてこない毎日であります。今振り返ると長くもあり短くもありました。大学で建築を学んでいた時はまさか自分自身が教員になるなど夢々思ってもいませんでした。

入学の年、昭和39年、西暦1964年は日本全国がオリンピックイヤーで活況を呈し、首都圏を中心に建築ラッシュや道路網の整備に土木・建築業界は賑わっていて、大卒の技術者は引っぱりだこの時代でありました。

### 学友は何処に

その年の4月、日本大学工学部建築学科に入学しました。自宅から須賀川駅までは徒歩で約20分、須賀川駅から安積永盛駅まで列車通学、安積永盛駅から徒歩で10数分、途中のアカシヤの林道が懐かしく思い出されます。

その当時、須賀川市に下宿していた建築学部の学友も多くいました。先輩には山野辺さん、大久保さん、末吉さん、疋田さん。同級生には川崎君、太田君、斎藤君、栗山君などよく通っていました。皆、優秀でした。川崎君、太田君は福島市内でそれぞれに事務所を構えて活躍しています。他の人たちは今、どうしているだろうか時々思うことがあります。起業家として会社を興し現役でバリバリやっているか、それとも定年を迎え第二の人生を優雅に暮らしているかもしれない。

### 教職へのきっかけ

卒論は「構造設計」で苦労したことを憶えています。また、教職課程を履修して「工業」の教員免許状を取得

したことから、現在の職業との運命的な出会いとなりました。

当時、工学部長の廣川先生から“教員になってみないか”とのお話をいただき、宮城県と新潟県のいずれかの工業高校を選択することから始まりました。人の一生が出会いの中から育まれる不思議さが感じられた瞬間であり、現在の教職員採用試験制度からはとても考えられないことでした。

### 教育の自由と規律

戦後60年を迎えた日本の教育は文化と伝統を踏まえ、生徒の自主的活動や個性の伸長といった面が強調されてきました。しかし、教育における自由は大切なことですが、行き過ぎると、欲求の充足が善であり、その抑制は悪であるかのように誤解され、放恣な欲求まで認める雰囲気が生じ、教育の荒廃現象が起こってしまいます。自由は規律に裏付けられてこそ生きるもので、自由と規律の調和ある教育の推進こそが、秩序ある学校生活を保障し、主体的に生きる力や社会性を育み、集団生活における規範意識を磨き、他者と交わることで自我の確立を促すのであります。

そのためには、校則等の一定のルールを守らせることなどの教師による他律的指導も必要であり、それができない教師は生徒の目も冷ややかとなり、生徒との共感的理解が得られず悩むこととなります。

### 教員の望ましい資質

わが国の経済が高度成長期にあった時代には、産業界を担う人材の育成に主眼が置かれ、高度な専門知識と指導力を兼ね備えた人材が要求されてきました。高校生も中堅技術者として京阪地域にどんどん送り込まれていきました。そして、経済の繁栄と科学技術の著しい進歩によって豊かな社会となり、物質の水準は向上しましたが、反面、公共性という良識が失われ、自由先行と利己主義が世の中に急速に広がって行って、人心の空洞化や貧しさが憂慮されてきています。

これらの世相を反映して、高校においても、いじめ・

## プロフィール

昭和20年	福島県須賀川市妙見に生まれる
昭和43年	日本大学工学部建築学科卒業
昭和43年	宮城県白石工業高等学校教諭
昭和47年	福島県立福島工業高等学校教諭
平成12年～	福島県立塙工業高等学校校長
平成15年～	福島県立福島工業高等学校校長
”	福島県産業教育振興会事務局長
”	全国工業高等学校長協会評議員
平成16年～	全国工業高等学校長協会理事



日大工学部旧本館前広場（昭和40年代）

不登校・非行・中途退学等の問題が山積しており、生徒の内面に視点を置く「心の教育」にどれだけ関わられるかが重要であります。すなわち、使命感や責任感、専門的知識と教科の指導力、適正な判断力と生徒理解、社会的良識と対人関係能力、心身の健康等、人間愛・教育愛を根底にした豊かな人間性を備えていなければなりません。「教育は人なり」と言われる所以であります。

こうした中、今年も平成18年度教員採用試験が各都道府県で実施されました。福島県の高等学校では1,117名が受験して52名が合格しました。実に21.5倍の競争率でした。工業では45名が受験して2名の合格、倍率は22.5倍でした。こうした厳しい中、日大工学部建築学科の卒業生が1名合格しました。彼は2年間、常勤講師として高校に勤務しながら挑戦し見事合格しました。すばらしいことであります。このような後輩がどんどん現われてほしいと願っています。

たまたま昨年、母校の工学部で教職課程講座で講演する機会があり、“教員に求められる資質”と題して90分間話しをしました。200名からの学生が真剣に聞いてくれたことに感激しました。その後、お茶会でも数人が残って、一人ひとりが教育に対して前向きに熱い思いをぶつけてきてくれたことや、全員から講演に関する感想が寄せられ、教育への熱心さがひしひしと伝わってくる事ができました。こういった工学部の教職課程に携わっている教職員の皆様方のご指導があってこそと実感させられました。今後とも、よろしくお願ひしたいと思います。



同窓会館のパス（福島工業高校）



上空からの校舎（福島工業高校）



正面玄関（福島工業高校）

## 結びに ～耐震強度の偽装問題から～

最後にどうしても書きたかったことがあります。学生時代に苦勞した「構造設計」が今社会問題になっているからであります。確か、学生時代に新潟地震が起きて、その当時から構造設計の重要性や安全性が叫ばれ、人の命の尊さは何よりも大切であり、何よりも優先しなければならないと言われ続けてきました。しかし、あれから40年経った今でも安全性への信頼が揺らいでいることは残念です。資本主義社会の中で経済性や合理性を追求することは当然であります。それはあくまでも法を遵守した中でのことであり、意図的に建築基準法を犯すことは一級建築士としてはあるまじき倫理観の問題だと思ひます。

これまでも、宮城沖地震や阪神淡路大震災、新潟中越地震と起きるたびに建築基準法改正の耐震基準を設け、安全に対する配慮がなされてきましたが、意図的な強度偽装までは考えても見なかったと思ひます。今回の件で、制度上の欠陥が露呈した形となりました。行政サイドでも、建築確認やチェックの方法、構造計算用プログラムのデータ改ざんが容易にできないシステムを組むなどの対策が早急に望まれます。

これから建築家をを目指す学生には、命を預かる大切な使命感に燃え、教員に求められる資質と同様に高い倫理観をもって挑戦してもらいたいと思ひます。

## 海外派遣研究員報告

## 近代都市計画の遺産・レッチワースを訪ねて

助教授 土方吉雄

平成17年の6月から9月まで、海外派遣研究員として、欧米を歴訪する機会に恵まれた。調査研究の内容については「海外出張研究報告書」にまとめたので、ここでは、調査スケジュールの合間に近代都市計画の遺産・レッチワースを訪ねたことについて記す。

7月4日朝、ロンドンの北56km、キングス・クロス駅から鉄道で約35分、人口約3万4千人の都市に向かう。

【まさか、3日後、このキングス・クロス駅を中心に犠牲者50人以上の同時爆破テロが起きようとは…。ロンドンからイングランド北部のチェスターに向かったのがテロ前日の6日であり、1日スケジュールがずれていたら、予定していた調査が困難になったであろう。テロのことは、日本からのメールで知り、その後も、安否を気遣うメールをいただき大変心強く感じた。テロ後、スコットランド地方を巡ったが、大した警戒体制にもあわず、順調にスケジュールをこなすことができた。ただ、ロンドンからイギリスを離れた11日には、まだキングス・クロスの地下鉄駅が復旧しておらず、隣駅ユーストンまでの700m余りを通勤者と一緒に重い荷物（14カ国分のガイドブックや資料のために32kgを超えていたにもかかわらず、空港では、「Heavy」の赤いステッカーを貼っただけで見逃してもらった）を引き摺る羽目になった。】

レッチワースは、イギリス人経済学者E. ハワードの田園都市構想「明日の田園都市」（20世紀の代表的な文明批評家ルイス・マンフォードに「20世紀の初めに、二つの偉大な発明がわれわれの目の前に現れた。飛行機と田園都市である。」と言わしめたように、その理念は、その後の近代都市計画に多くの影響を与えた）に則って、1903年から開発着手した世界初の田園都市である。経済的自立都市を目途とし、市街地は、住宅地、商業地、工業地から成り立っている。その市街地周辺を、ハワードが「都市と田園の結婚」と言ったように、ファーム・ベルトと呼ばれる恒久的な農地が囲み、市街地の物理的拡大を制限すると同時に、その農地による食料自給をも目指している。そのファーム・ベルトを列車から眺めると、まもなくレッチワース駅に到着する。

レッチワース駅を降り立つと、2つのロータリーがあり、東側が中心商業地、西側がブロードウェイという名の花と緑の美しい道路（都市の主軸）に連なっている。中心商業地の通りは歩車共存が図られ、アーケードのある歩行者専用空間の商店街もあり、なかなか賑わっている。また、ブロードウェイを少し歩くと右側に、カレッジの一部跡地を再開発した大規模スーパーマーケット「モリソンズ」（1999年開店、建物規模6440㎡、駐車台数529台）がある。既存商業集積との共存に配慮したテナント構成や既存アーケードへの客誘導計画とし、さら

に1910年代建物のファサードを取り込み、街並み景観に配慮したデザインとなっている。そして、この再開発を契機として、既存商業地でも、ランドマークの映画館改装や舗道改修などが行われたとのこと。それらの結果、駅周辺商業地全体としての魅力が高まり、1980年代、購買力の外部流出7割という著しい衰退を示したとは思えないほど、現在賑わいを取り戻している。



歩車共存の中心商業地



アーケードのある歩行者専用空間の商店街

ブロードウェイをさらに南進すると、道路に挟まれたブロードウェイ・ガーデンという広場がある。この広場からは、車輪のスポークのように8本の道路（当初の計画では12本？）が放射状にでており、広場周りには景観に配慮したファサードを持つタウンホール、図書館、カレッジなどの公共施設が集中し、心地よいタウンセンター地区を形成している。

ブロードウェイ  
(右奥建物がスーパーマーケット「モリソンズ」)



ブロードウェイ・ガーデン  
(左建物：カレッジ、右建物：タウンホール)

さらに南進すると、6 叉路のロータリー型交差点があり、その一角にハウードの提案で計画されたという単身者・小家族のためのコーポラティブハウス「ソーラッシュット・ホール」がある。建物は、囲み配置で落ち着いた雰囲気の中庭を持ち、その中庭は、多様な住人のコミュニティ形成のための重要な場となっている。

このほか、レッチワースには、多様な住宅タイプ（大小のデタッチド、セミデタッチド、連続住宅など）が用意されており、ライフサイクルに応じた住み替えが容易になっている。

また、住宅地の街並みをみると、いずれの住宅も道路から後退して建てられているが、道路のヒエラルキーや道路からの後退距離によって、少し高めの生け垣が設けられたり、美しく手入れされたオープンな前庭と歩道、街路樹が一体となっていたり、様々な表情を見せている。このような前庭のデザインは、デザイン・ガイドラインが設定され、守られている。建物についても、デザイン・ガイドラインにより、増・改築、窓やドアのデザイン、壁と屋根の材料などがコントロールされ、統一感ある美しい街並みが保全されている。

以上のような商業地や住宅地における都市運営には、「レッチワース田園都市遺産財団」（1995年に公社から移管）の功績が大きい。すなわち、レッチワースでは、ハウードの理念「投機的行動を防ぐため土地を公有化し、借地は土地利用を定め規制する」と「開発利益の一部をコミュニティのために保留し社会還元する」が実行されてきた。そのため、ほとんどの土地所有権は、財団が所有し（サッチャー政権下、借地人が土地所有権を手でできる政策が推進され、一部土地所有権が財団から借地人

へ転換した）、借地人に対しては、借地契約の細則（カベナント）で、土地所有者に対しては管理規則（カベナントと同じ内容）により、建物デザイン等のコントロールを実現している。また、地代収入は、公共基盤の維持・管理や新たな整備、さらに慈善事業への支援等に使われている。



ハウードが提案したコーポラティブハウス



E. ハウード



デザイン・コントロールされているデタッチド

このように、100歳を超えてなおかつ持続的な発展を続けているレッチワースを訪ね、以下のようなことを改めて感じざるを得ない。それは、わが国における人口減少、高齢化の著しい郊外住宅地開発や中心市街地活性化計画などを顧みると、そこにはコミュニティの維持、持続的な地域の魅力づくりという都市経営視点が欠落していること。そして、その必要性…。



セミデタッチド



統一感ある美しい街並み

## 第34回ヨーロッパ研修旅行報告

## ケンブリッジ大学からポンペイの遺跡まで

教授 若井 正一

本学部主催第34回ヨーロッパ研修旅行は、参加学生が60名、引率の教職員が3名、それに添乗員が2名の総勢65名という大規模な団体旅行となりました。

旅行日程は、平成17年2月23日から3月10日までの約2週間でしたが、幸い全員無事に帰国することができました。参加学生の内、建築学科の学生が23名と最も多く、私が団長を務めたこともあり、今回の旅程の概要と所感についてここにご報告いたします。

出発日の2月23日(水)は、午前中に成田空港にて出発式、搭乗手続きを終えて、春一番の吹く中をJAL401便で一路ロンドンへ飛び立ちました。順調なフライトで当日の夕刻(現地時間)には、ロンドン・ヒースロー空港に到着しました。到着後まもなく、貸切バスでロンドン市南西部のホテルにチェックインしました。このホテルは、ロンドンのイベント会場として有名なアールスコートに近く、同名の地下鉄駅まで徒歩圏内でした。

2月24日(木)は、やや肌寒い日でしたが、全員がバスで午前中にロンドン市内研修、午後に本学と提携しているケンブリッジ大学への表敬訪問を予定通り行いました。最初に訪れたバッキンガム宮殿は、みぞれ混じりの寒さの中で、身動きせず立っている衛兵の姿が印象的でした。その後、国会議事堂、ロンドン塔などの市内の代表的な名所を巡りましたが、最近完成した世界一といわれる観覧車「ロンドン・アイ」は、1つのゴンドラになんと25人も乗れるというスケールの大きさに驚かされました。また、ケンブリッジ大学トリニティカレッジでは、ハリポッターの映画に出てくるような学生食堂で説明を受けた後、カレッジの学生たちが大学内を案内してくれました。短時間の訪問でしたが、中世の面影を残す古い建物や彼らの丁寧な説明の中に、英国を代表する伝統校の雰囲気少しばかり触れた思いでした。

2月25日(金)は、午前中が2班に分かれて廃棄物処理会社ロンドンウェイスト社と環境改善運動のグラウンドワークを訪ねて研修を行いました。私は、後者を引率しましたが、地域の小さな橋や通りをデザインするために地域住民の意見を反映させながら綿密に計画実行する姿勢に感心させられました。午後は、2班が合流して大英博物館の見学を行いました。同博物館は、かつて英国留学時代に毎日のように来ていた場所でしたが、建物の内部が大幅にリニューアルされて、入館のライセンスが必

要だったドーム型図書館に誰でも自由に入れるようになっていたのは驚きでした。

2月26日(土)は、終日自由行動の日でした。私は、ロンドンの中心部にあるコベントガーデンにある交通博物館などを訪ねました。

2月27日(日)は、ロンドンからパリへの移動日で、午後3時過ぎに特急列車のユーロスターでロンドン・ウォータールー駅からドーバー海峡を越え、夕刻にはパリ市内の新興地域にあるホテルに到着しました。

2月28日(月)は、午前からパリ市内の名所旧跡をバスで巡りました。セーヌ河畔に建つノートルダム寺院、エッフェル塔を背景にした記念撮影、そして昼食後には、いよいよ世界の美術界を代表するルーブル美術館を訪ねました。館内の見学は、人数の関係で3班に分かれて「モナリザ」など数多くの名作を観て回りましたが、短時間でその全容を知るとはとても無理なスケールでした。その晩は、全員で夜行バスに乗ってモンマルトルの丘近くにある小さなレストランでの会食に出掛けましたが、店主から誕生祝のワインの振る舞いなどもあって、素敵な雰囲気の晩餐でした。



大英博物館のホワイエ



エッフェル塔



ロンドン地下鉄車内



パリ・オペラ座正面

3月1日(火)は、終日自由行動またはオプションツアーの日でした。私は、モンサンミッシェル修道院の見学研修を引率しましたが、もう一方のツアーは、ロワール渓谷の古城巡りでした。どちらも貸切バスによる1日観光でしたが、パリからモンサンミッシェル修道院までは、まさにフランス縦断といった長旅でした。昼食に出された伝統的なオムレツ料理やノルマンディの海辺に忽然と佇む当修道院の壮大な石の建造物に大いに感動させられました。

3月2日(水)は、午前がパリ郊外にあるベルサイユ宮殿の見学、午後が半日自由行動の日でした。この日の気温は氷点下で、ベルサイユ宮殿の噴水も見事に凍りついていました。宮殿の壮麗なインテリアに見とれている間に見学時間が終了し、ほどなくパリ中心部に戻って自由行動となりました。

3月3日(木)は、早朝にパリのドゴール空港を発ってローマへ向かいました。飛行機は、全員一緒ではなく2便に分かれて出発しましたが、ローマに到着後にほどなく合流して市内研修を行いました。かの有名な円形競技場コロッセオ、トレビの泉などのローマ市内の名所旧跡を巡り、夕刻には市の高台にあるホテルに到着しました。このホテルは、ロンドン、パリで宿泊したホテルに比べて、客室が広く、室内装備も良く整っていて好評でした。

3月4日(金)は、午前がバチカン美術館の見学、午後が自由行動日でした。今回の旅で懸念されていたことの1つに、バチカン市国のローマ法王が重態であると報道されていたことがありました。もし、旅行中に崩御されるような事態になった場合、ローマ市内はかなり混乱することが予想されました。しかし、当日のローマ法王の容態は危篤のままで、市内は嵐の前の静けさのようでした。そんな情勢のせい、バチカン美術館への入場者は大行列で、小雨の中を1時間以上も並ぶ有様でした。その入場者の多さに驚くとともに建物内部のいたる所に施された華麗な装飾や壁画は、まさに圧巻でした。特に、システーナ礼拝堂の大壁画は、キリスト教徒でなくとも感動させられました。

3月5日(土)は、終日自由行動の日でしたが、私は、オプションツアーでナポリ・ポンペイへの一日研修を引率しました。このツアーには、参加者が多くバス2台で出掛けました。ベスビオス火山の噴火で灰に埋まっていた紀元前のポンペイの遺跡では、歩道や下水道まで敷設された石畳の道路や噴水のある家など当時の暮らしの豊かさに驚かされました。海辺のナポリは、とても暖かく久しぶりに明るい太陽を拝むことができました。その晩、ローマ市内の某レストランで大学主催の「さよならパーティ」を開催しました。

2人の添乗員に感謝の花束を贈ることから始まったパーティは、学科や学年をこえて親しくなった参加者同

士が楽しく語り合い、思い出に残る交歓会でした。

3月6日(日)は、終日自由行動の日でした。前夜のパーティの疲れも見せず、若い学生諸君は市内観光やショッピングなどに飛び回ったようです。この晩に訪れたレストランでは、見事なカンツォーネを聞くことができました。この頃、旅慣れてきたこともあって残り少ない旅行を惜しむ声も聞かれました。今回参加した学生諸君のほとんどは初めての海外旅行でしたが、参加者の諸君には、今回の経験を生かして、次回には自分の足で広く海外へ飛躍されることを祈念します。

3月7日(月)は、いよいよ帰国の日です。午前中は各々自由に過ごし、午後にローマのフィウミチーノ(レオナルド・ダ・ヴィンチ)国際空港からドイツのフランクフルトで乗り継いで、そこから午後8時過ぎ(現地時間)のJAL408便で成田空港へ向かいました。順調なフライトで、3月8日(火)の午後4時過ぎに無事成田空港へ着陸しました。入国審査を終えて全員の無事を確認の後、空港内で解散式を行いました。

第34回ヨーロッパ研修旅行が成功裡に終了できたことは、今回参加した60名の学生諸君の団結力と本学関係者のご支援の賜と存じます。ここに、関係各位に改めて深謝いたします。



バチカン市国



ポンペイの遺跡

### ■大濱嘉彦教授の関連記事：

① 8月6日に、韓国の国立全北大学校工科大学で開催された、第12回韓・日・中(材料・施工系)学術交流研究発表会に出席し、"Recent Status in Research and Development Activities of Concrete-Polymer Composites in Japan"と題して特別講演された。又、同学術交流研究発表会において、太田将弘大学院生は、"Properties of Polymer-Modified Mortars Using Redispersible Polymer Powders with Nitrite-Type Hydrocalumite"と題して発表を行った。

② 8月22日から24日まで、カナダのバンクーバーで開催された、The Third International Conference on Construction Materials (ConMat05')に出席し、"Recent Status of Research and Development in Polymer-Modified Mortar and Concrete in Japan"と題して基調講演をされた。

③ 9月5日から9日まで、ロシアのモスクワで開催された第59回RILEM (国際材料構造試験研究機関・専門家連合)年次総会に、National Representative 日本代表、Bureau Member 理事及びTechnical Committee 194-TDP委員長として出席された。

④ 9月23日に韓国の舟城大学で開催された、International Seminar on Repair Work for Deteriorated Reinforced Concrete Structuresに出席し、"Concrete-Polymer Composites for Repair Work for Deteriorated Reinforced Concrete Structures"と題して基調講演をされた。

⑤ 10月27から28日まで、ベルギーのブリュッセル並びにルーヴァンで開催された、RILEM TC 194-TDP及びTC 192-ECM Meetingに、Technical Committee 194-TDP委員長及びTechnical Committee 192-ECM委員として出席された。

⑥ 11月9日に東京で開催された、建材技術研究所(KGK)主催の講演会の講師として出席し、「光触媒の原理と建設分野への利用/RILEM TC 194-TDP」と題して講演をされた。

⑦ 11月15日に東京で開催された(社)日本建築学会 材料施工委員会 鉄筋コンクリート工事運営委員会 コンクリート・ポリマー複合体の試験方法小委員会 (主査：大濱嘉彦)主

催の「第2回コンクリート・ポリマー複合体シンポジウム コンクリート・ポリマー複合体の試験方法に関する技術の現状」に講師として出席し、「主題説明」及び「コンクリート・ポリマー複合体に関する試験方法の動向」と題して講演された。

⑧ 11月21日から23日まで、南アフリカのケープタウンで開催された、International Conference on Concrete Repair, Rehabilitation and Retrofitting (ICRRR 2005)に出席し、"Properties of Polymer-Modified Mortars with Hydrocalumite for Intelligent Repair Materials"の論文を発表された。

⑨ 12月8日にポーランドのワルシャワ工科大学で開催された、ワルシャワ工科大学土木工学科90周年記念式典に出席し、「祝辞」を述べられると同時に、"Concrete-Polymer Composites for Repair Work for Deteriorated Reinforced Concrete Structures in Japan"と題して基調講演をされた。

## 教室ニュース

### ■出村克宣教授の関連記事：

① 齋藤俊克大学院生 (出村研) は、6月22日～24日に開催されたコンクリート工学年次大会2005(名古屋)において、第27回コンクリート工学講演会年次論文奨励賞を受賞した。

② 9月1日に福島県より、「うつくしまエコ・リサイクル製品認定審査会」の委員を委嘱された。

③ 9月30日に本学部で開催された「平成17年度機能性材料・製造プロセス研究会」(主催：(財)郡山地域テクノポリス推進機構)において、コーディネータを努めると共に、「日本大学工学部次世代研究センター第2プロジェクトにおける研究成果と今後の展望」と題して講演された。

④ 10月24日に本宮町で開催された「環境マテリアル推進協議会全国大会」(主催：非営利有限責任法人環境マテリアル推進協議会)の「環境マテリアル」に関するパネルディスカッションにおいて、パネリストを努められた。

⑤ 10月25日に本学部で開催された「東北工学教育協会第53回年次大会」(主催：東北工学教育協会)の「産学連携とこれからの工学教育の

あり方」に関するパネルディスカッションにおいて、コーディネータを努められた。

### ■若井正一教授：

下記の高等学校の依頼による模擬講座や一日大学において、「住まいの夢とインテリアの知恵袋」と題して講演された。

① 白河旭高校 (6月21日)、② 福島西高校 (6月22日)、③ 郡山北工業高校 (7月2日)、④ 山形酒田南高校 (8月19日)、⑤ 群馬県立渋川女子高校 (11月17日)。

### ■土方吉雄助教授の関連記事：

① 6月25日、福島県より福島県景観アドバイザーを再委嘱された。

② 9月1日、福島県より福島県建築審査会委員・会長代理に再任された。

③ 9月29日、田村市より田村市都市計画審議会委員を委嘱され、会長に選出された。

④ 10月12日、郡山市より郡山市公共事業評価委員会委員を再委嘱された。

⑤ 10月17日、郡山市より郡山市中心市街地活性化推進委員会委員を委嘱され、委員長に選出された。

⑥ 11月9日、福島県景観アドバイザー派遣事業により、郡山市景観づくり推進員研修会の講師を依頼され、「景観づくりに向けて」と題して講演した。

### ■浅里和茂助教授：

(社)福島県設計協会主催の住宅シンポジウム (11月6日・コラッセふくしま)において講演された。演題「耐震診断からみた地震に強い住宅のポイント」

### ■岩崎講師・浅里助教授・市岡講師：

東和町より「東和町統合小学校建設に係る設計競技審査委員会」委員を委嘱された。(10月1日付け)。岩崎講師 (前教授) が委員長となり、11月13日に公開審査会が行われた。

### ■人 事：

本学科に永年勤務され、ご活躍された下記3名の先生方が、本学の定年の規程により退官されました。

・有賀保二助教授 (平成17年8月3日付)

・岩崎 博 教授 (平成17年9月30日付)

・佐藤 平 教授 (平成17年9月30日付)

【編集後記】：ネットワークOB & OGの連載は、今後も各分野で活躍する本学科の卒業生に執筆をお願いしたいと存じます。なお、学術論文、研究発表の記事は、紙頁の関係で次号に掲載する予定です。